

主題：よりよい未来を志向する子の育成（3年次）

副題：未来へ生かす決める

1 研究主題設定の理由

(1) 社会情勢

A I 等の技術の発展と社会の変化は、今後訪れる社会がどのようなものを正確に予測することを極めて難しくさせている。2018年6月に Society5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会から出された「Society5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」では、次のように述べられている。

予測困難な社会の変化の中で豊かに生きるためには、楽観論でも悲観論でもなく、変化に対して受け身で対処せず、むしろ目指すべき社会像を議論し、共有し、実現していくことが重要となる。

我々が目指すべき社会は、経済性や効率性、最適性だけを追求した無機質なものではなく、あくまでも人間を中心として、一人一人が他者との関わりの中で「幸せ」や「豊かさ」を追求できる社会であるべきであろう。

私たちが育てていきたいと考える子どもは、主体的に学んでいこうとする子どもであり、これから先の未来を切り拓いていける子どもである。自ら進んで学ぶことができる子どもは学校社会から巣立ってから、変化の激しい現代社会を生きぬき、社会の中においてもたくましく、学び続ける人となっていくと考えるからである。

様々な方法で情報を獲得することができる今、その多様な情報の中から、必要な情報を選択・判断し、目的に応じて活用できる力が必要となってくる。そのためには、子どものころから、自分にとって必要な情報を取り入れ、仲間とともに情報交換し合う中で、試行錯誤しながら解決する経験を積み重ねることが重要になってくる。

(2) 学習指導要領

平成 29 年 3 月公示の新学習指導要領では、これからの未来を切り拓くための資質・能力として、子どもに生きてはたらく「知識・技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」をあげている。これらの資質・能力を育むためには、各教科等において子どもが「どのような視点で物事をとらえ、どのような考え方で思考していくのか」という教科等ならではの物事をとらえる視点や考え方である「見方・考え方」をはたらかせて学びに向かうことが必要とされている。これは各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものである。

そのためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。子どもが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるように、今までの学校教育の蓄積を生かし、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントに努めながら、取組を活性化していくことが重要であると述べている。

(3) 前研究「考える子」

本校では前研究の3年間「考える子を育む」を主題に研究を進めてきた。3年間の研究から子どもの「問う→考える→気付く」という考える過程の質や量が向上し、多角的な方法や視点

から対象について考える姿が見られた。また、自他を認め、他者と協働しながら考えを更新する姿が見られた。さらに、学んだことや学び方の自覚だけではなく、友達や自分の変容や成長を自覚する姿や、自分から学ぼうとする姿、学んだことを他教科や生活に生かそうとする姿が見られた。

子どもは「問い」や「こだわり」をもちながら学ぶ過程で「学ぶ楽しさ」を味わうことが考える原動力となり「考える子」へと近づくことができた。このような子どもの姿からより「考える子」へと成長するためには、子どもの「もっと〇〇したい」という「こだわり」を実現するための力が必要となるのではないかと考える。

(4) 研究の目的

本研究の目的は、これからの未知なる状況を切り拓いていくためによりよい未来を志向する子を育成していくことである。よりよい未来を志向する子を育成していくには、どのような力を子どもにつけていかなければならないのかを明確にし、そのためには教師が単元や授業の中でどのようなはたらきかけをしているのかを考え、実践していくことが必要である。その実践により子どもに必要な力を身に付けることができたのかを検証し、さらに子どもに力がつくようにしていく。

2 研究主題 よりよい未来を志向する子の育成

(1) よりよい未来を志向する子とは

「よりよい未来」とは、「こうしたい」「こうなりたい」と願う今から未来へと進むべき自分や仲間の姿、生き方、価値観のことである。「志向する」とは、仲間とともに今を見だし、これから先へと考えをふくらませたり、行動したりしていくことである。つまり「よりよい未来を志向する」とは、自分が直面した課題や設定した目標をしっかりと把握して、その課題や目標に対して「自分がこうしたい」「こうなりたい」といった思いをもち、具体的にその姿をイメージし、今から未来永劫へと、仲間とともに試行錯誤をくり返して行動していくことである。

(2) よりよい未来を志向する

2年次までの研究実践から、「よりよい未来を志向する」には次のような姿があることが明らかになった。

- 教師が子どもにとっての必要感、子どもの願いや思い、単元終末時の子どもの姿などをより具体的にイメージして、単元や授業を考えることで、子どもが課題や目標に向かって学び続ける原動力へとつながった。
- 教師が新たな視点を与えたり、他とのかかわりの場を設定したりすることで、子どもはいくつもの事象から物事を多角的に見て判断する姿や、友達と思いや考えを共有しながら自分の作品や検証方法、考え方を見直し、よりよくしようと試行錯誤する姿が見られた。また、自分の思いや考えだけにとらわれるのではなく、チームやクラス全体のことを考え、その中でのよりよいものをつくり上げる姿も見られた。
- 教師が日常生活の中にある場面を想起した問題を提示したり、生活場面をふり返ったり、子どもの疑問を引き出す事象を提示したりすることで、子どもは追究の必要感が生まれ、自分の思いや考えを具体的にしてもつことができた。

本校では、これらの姿をもとに、「よりよい未来を志向する子」を次のように定義する。

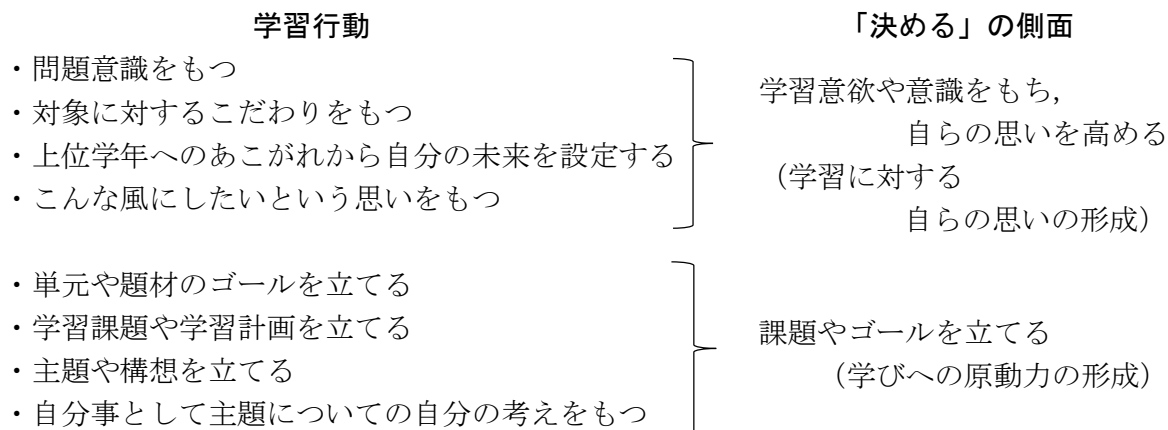
- ・学習に対する課題意識・目的意識をもち 学び続ける子
- ・友達と思いや考えを共有しながら 多様な視点から自らの思いや考えを更新する子
- ・今までの学びを実生活や実社会に広げ 自らの思いや考えを未来の自分へとつなげる子

3 副題 未来へ生かす決める

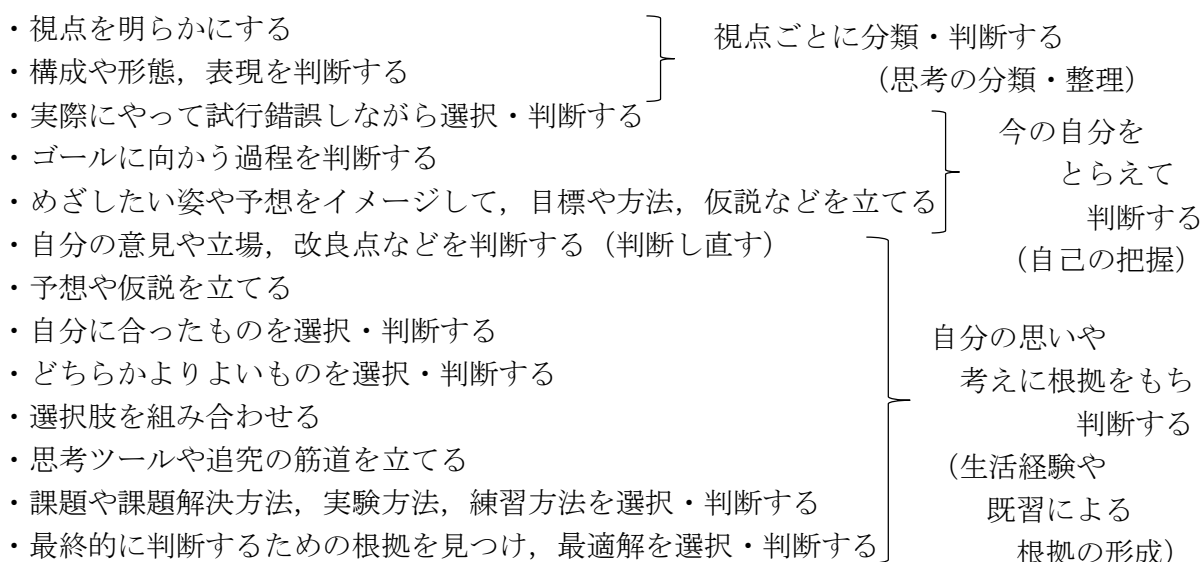
(1) 1年次 決める授業をデザインする

1年次に各教科で子どもが「決めたこと」を「決める」とは別の学習行動で表現し分類・整理していくと、次のような学習の流れと「決める」の側面が明らかになった。

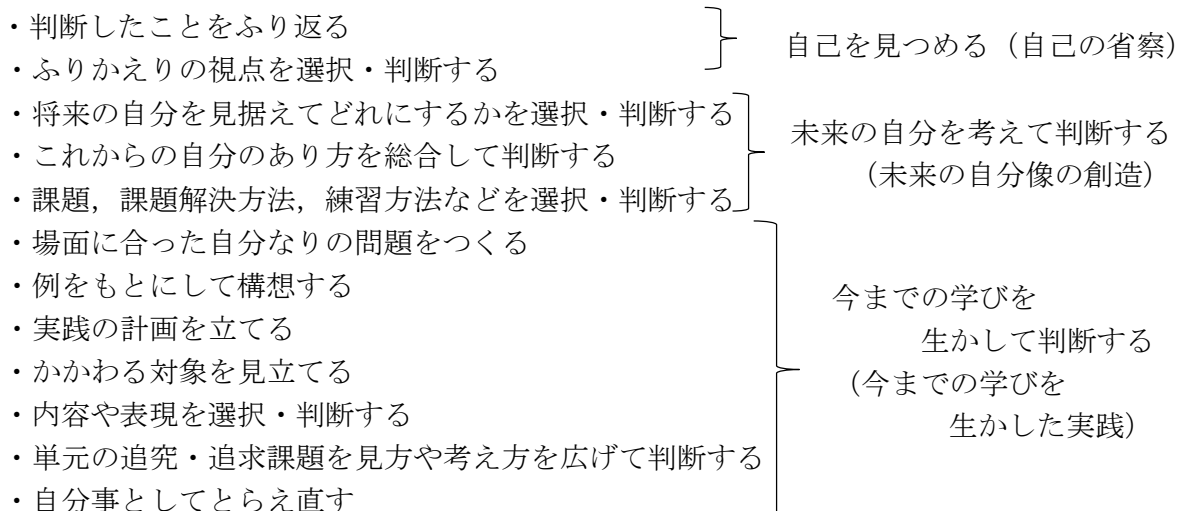
①課題やゴールを設定する過程で 学習意欲や意識をもち 学びへの原動力を形成する「決める」



②課題を追究・検討する過程で 学習過程や解決方法を多様な視点から根拠をもって判断する「決める」



③既習を生かす過程において 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

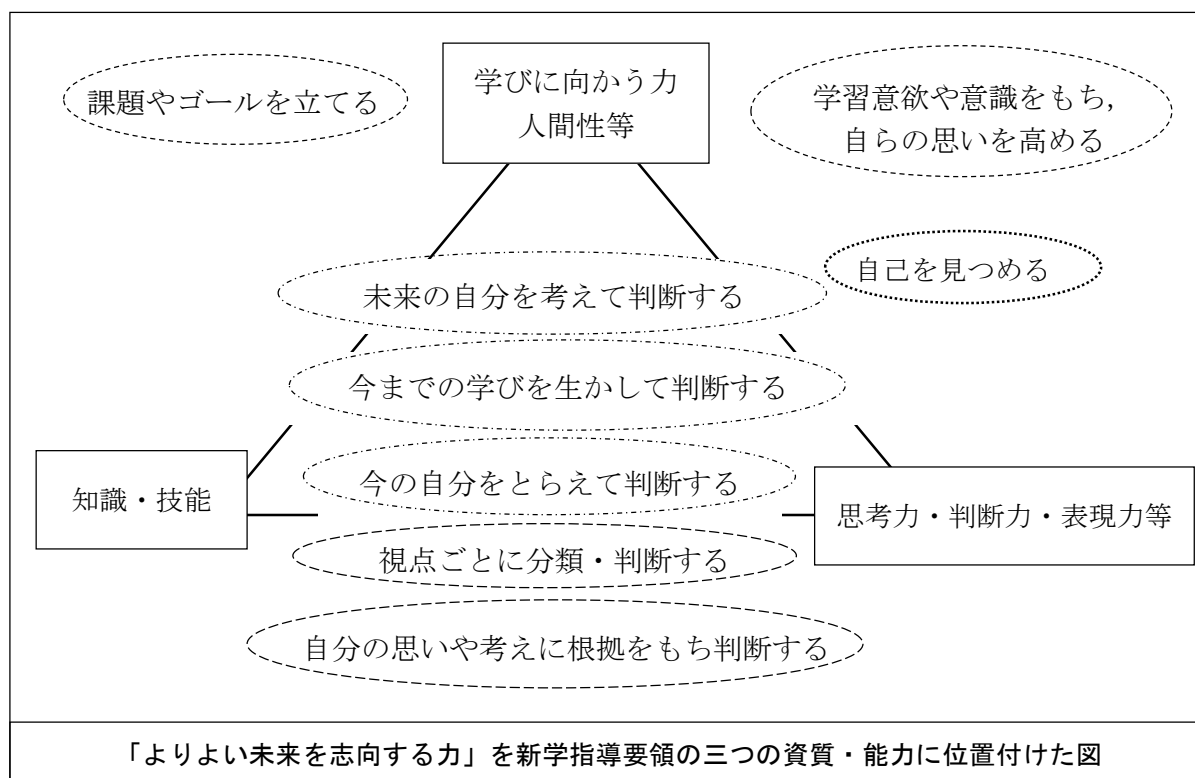


1年次は、よりよい未来を志向する子の育成のために、研究副題を「決める授業をデザインする」と設定し、子どもが決めることを意図的・計画的に授業を組み入れることにより、よりよい未来を志向する子が育まれるという仮説のもと実践を重ねた。その結果、授業の中で「こうしたい」「こんな姿になりたい」という子どもの思いや考えから課題を見だし、そこへ向かうために子どもが決めることをくり返していくことにより、よりよい未来を志向する子の姿が見られた。

このことから、子どもは生活とのかかわりを感じることができる事物や現象、自分にとって魅力のある作品との出会いによって解決や追究への意欲を高めていくことが明らかとなった。また、その中で自分の思いや考えを決めて、ゴールへ向かうための見通しをもつことやゴールを設定することで、多様な視点や考えが必要であることに気付き、友達や教師などと積極的にかかわり合い、自分の思いや考えをよりよく決めることに大きく関連していることを認識することができた。そして、決めたことをふり返ることで、自分の学んだことを実感し、自分の価値や考え方を決めることも大きく関連していることがわかってきた。

(2) 2年次 決める授業をデザインする

1年次の研究により、子どもが「決めたこと」を分類・整理してみると、「決める」を手段や方法として認識していたが、「決める」の側面が本校の主題にかかわってくる「よりよい未来を志向する力」そのものであり、子どもにとって求められている今必要な資質・能力との関連性が見えてきた。資質・能力とは新学習指導要領において述べられている、生きてはたらく「知識・技能」の習得、未知なる状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養のことである。よりよい未来を志向する力と新学習指導要領における三つの資質・能力の関係を以下のように位置付けた。



また、1年次の研究から各教科等によって、よりよい未来を志向する子の「未来」とは、いつのことをさすのか、そのとらえ方に差があることがわかってきた。今から明日へとつながる近い未来ととらえたり、今からさらに先の遠い未来のことを設定したりする教科が見られた。

2年次の研究では、以下の3点を意識して授業をデザインすれば、よりよい未来を志向する子を育成することができるのではないかと考え実践を積み重ねた。

①学びへの原動力を形成する決める

単元や授業の導入の過程などにおいて、子どもが学ぶ必要感や目的意識をもつことで、子どもが自ら学ぶ意義を知り、その思いや考えを単元や授業を通して学習し続けていこうとする力となる。子どもが自らの学びへとつなげる意欲や意識をもたせるような授業を工夫する。

②多様な視点から根拠をもって判断する決める

子どもが根拠をもって判断するには、生活経験や既習を想起させ、根拠をもって自分の考えをもつ必要がある。他者とのかかわりから多様な考えにふれることで、子どもはもう一度課題を見直したり、既習で得た知識や情報を整理したり、新たに必要な情報を求めたりする。

③今までの学びをふり返り 未来に役立てる決める

単元や授業の中で自己を省察することで満足感や達成感を味わい、向上心や理想像をもつことへつながる。学んできたことを土台にして子どもがその学びを実践していくことで、その学びを実感することができる。

実践を積み重ねる中で、下の次のような成果及び課題が見られた。

- ・子どもにとっての必要感や目的意識・課題意識をもつことで、子どもは自らの思いや考えを見だし、課題解決に向けて試行錯誤をくり返しながら主体的に学び続けようとする姿が見られた。
- ・友達と思いや考えを共有したり、多様な視点をもとにしたりすることで、自分の考えをもう一度考え直したり広げたりする姿が見られた。また、個々やグループでよりよい考えや表現を工夫したり、共感やアドバイスしたりすることをくり返すことで、仲間との思いを共有する意識が育まれた。
- ・単元で学んだことをこれからの自分に役立てる意識が一部で見られた。だが、子どもに自己を省察させるための手だてが十分ではなかった。また、教師の授業省察の視点が明確ではなかった。このことから、単元の途中段階において自己の変容や成長に気付かせられなかったことや学びを未来へと役立てさせられなかったことが課題として残った。

(3) 3年次 未来へ生かす決める

2年次までの成果を受け、「よりよい未来を志向する子の育成」の最終年度として、これから先の未来を切り拓いていく子どもを育てていくには、学習を通して自己の考え方・感じ方を再構成し、自己の変容や成長を確認するという省察していく力をさらにつけていくことが必要であると考えた。また、そのためには子どもが対話することの快感を感じ、「よりよい未来を志向する子」を育成するための決める授業デザインを基盤としていく。

そこで、今年度は子どもの学習のふりかえり・省察の機能について着目する。ふりかえり・省察することは、自己の学びを客観視し、次の思索に向かうための自己再生をすることにつながると考える。そのためには、授業における学習のふりかえり・省察の方法や時期、内容などを模索する必要がある。

例えば、授業終末時や場面で実施されるだけでなく、単元の始まりから終了時などの単元全体の取り組みを考え、随時実施することでどのような効果がもたらされるのか、またどのような視点を明示すると学習のふりかえり・省察が効果的であるか等を検証していくことで、子どもが自己の思考の再構成をしたり、次なる課題の確認・発見につないだりしやすくなると考えた。

よって3年次は、副題を未来へ生かす決めるとし、今までの学びを生かす子どもの姿を重視

しながら研究を進めていくこととした。多田(2018)は、学習への取り組みについてのふりかえり・省察は事後の考え方や生き方を確立していく基礎づくりにつながると述べている。そこで、本校では、授業全体を通してのふりかえり・省察を行うことから、以下のような仮説を立てた。1学期間、書くこと等を通してふりかえり・省察を行い、授業実践の具体をもとに、ふりかえり・省察を定義付けていく。

- ふりかえり…授業により自己の考え方・感じ方を再組織し、自己の成長を確認する、学ぶことの快感を感得する、次の課題を明確にすること
- 省察…単元、題材を通して学んだことにより自己の考え方・感じ方を再組織し、自己の成長を確認する、学ぶことの快感を感得する、次の課題を明確にすること

(4) 未来へ生かす決めるを促す授業デザインの重点

これまで実践してきたことをもとに、未来へ生かす決めるを促す授業デザインでは、以下の3点を重点として実践に取り組む。さらに前項で述べたように、今年度は学習のふりかえり・省察の方法や時期、内容に特化し、模索していく中で、実践の質を高めていくこととする。しかし、これまでの2年間の研究成果における知見と今年度の重点であるふりかえり・省察をすることは往還していることから、以下の①、②においても意識して実践していく。

①学びへの原動力を形成する決める

子どもが学びへの原動力を形成するには、子ども自身が「知りたい」「やってみたい」という思いや考えをもち、学ぶ必要感や目的意識をもつことから始まる。単元や授業の導入の過程などにおいて、前単元などによるふりかえり・省察を生かすことで、子どもに学ぶ必要感や目的意識をもたせたい。またそのことから、子どもは自ら学ぶ意義を知り、その思いや考えを単元や授業を通して学習し続けていこうとする力となっていくと考える。そのためには子どもが自らの学びへとつなげる意欲や意識をもたせる授業となる工夫をしていく必要がある。

②多様な視点から根拠をもって判断する決める

子どもが根拠をもって判断するには、生活経験や既習してきたことを想起させ、根拠をもって自分の思いや考えをもつ必要がある。また、視点を明らかにしたり、視点を変えたりするには、他者とのかかわりが必要になってくる。そこで個としての考えや結論などをもとに、他者とのかかわりや多様な考えにふれることで、子どもはもう一度課題を見直したり、既習で得た知識や情報を整理したり、新たに必要な情報を求めたりする。つまり、自分の思いや考えをもう一度とらえ直すという学びの再構成の機会が生まれ、自分の思いや考えを前よりも確かなものにしたり、更新したりすることができるのである。そのためには、毎時間の学習のまとめを受け、ふりかえりを通じて学習成果を個に内面化することが肝心である。ここでは、他者を意識した視点を明示したふりかえり・省察をすることで、他者とのかかわりや多様な考えから受けた影響を自覚し、予想外の気づきや新たな発見などの考え方の広がりを認識するであろう。

また、ふりかえり・省察の精度を上げるには、自己の変容や次への学習を実感させる場面や視点など、何をふり返らせたらよいのかをあらかじめ考え、友達とかかわりながら学ぶよさに気付く授業デザインをする必要がある。

③今までの学びをふり返り 未来に役立てる決める

単元や授業の中で、自己をふりかえり・省察することで、「わかった」「できるようになった」という満足感や達成感を味わい、学ぶことの快感を感得し、「次はできるようになりたい」「次はこうしたい」という向上心や理想像をもつことへつながる。また、学んできたことを土台に子どもがその学びを実践していくことで、これまでの学びが定着し自分なりの見

方・考え方を身に付け、汎用的な見方・考え方を習得する。このことから、ふりかえり・省察を生かすことは学んだことを組み合わせることや消化することを得て、新たな自分の考えをもつことになる。さらに、次の課題を明確にすることで、この学びが何に生かされているかということに気付くことやその学習を通して得た結論に対しても、「本当にこれでいいのか」などともう一度問い直し、それを確かめるための方法を考えるという再確認の学習をすることにも期待できる。このふりかえり・省察の時期については、学習の導入時、学習のプロセスにおいて、終末とさまざまである。だが、一単元のみで終わらず、長い期間にわたる取り組みにより、さらに自己の成長を確認することにつながり、未来に役立てる自己の考え方や生き方を確立していく基礎となる。

教師は、子どもがふり返ったことをもとに学びの深まりや広がりを見いだして、次の学びへとさらに向かうことができるかを考えて、授業デザインを修正しながら進めていく。

4 研究の取り組み

(1) 研究の方法

1学期はふりかえり・省察フォーマットを用い、ふりかえり・省察を行っていく。ふりかえりは、L（わかったこと）、F（友達の意見でよいと思ったこと）、T（これからやってみたいこと、感じたこと）の3点を記述するようにした。省察は次の3点について記述させた。1点目は、変容として単元導入時と単元終末時の自己変容、2点目は、展望として本単元の学びを今後の学習や生活にどのように生かすか、3点目は挑戦として、これからどのようなことを学びたいかということを記述させた。

研究を進めるにあたり、本研究を二つのフェーズに分けて進めていくこととする。第1に、上記ふりかえり・省察における条件に基づき、1学期間に各教科で実践を重ね、事例を収集する。収集した事例をもとにふりかえりと省察の考察を行う中で、前項で定義したふりかえり・省察を本校の事例に適応するよう再定義を行うとともに、ふりかえり・省察における条件を再検討する。この過程をフェーズ1（1学期）とする。第2に、フェーズ1で得られた知見をもとに実践を重ねる中で、研究の質を高めていく。この過程をフェーズ2（2・3学期）とする。

(2) フェーズ1における結果と考察

上記条件に基づき、フェーズ1では各教科で実践を重ね、事例を収集する。以下の表は、ふりかえり・省察における各項目の特徴的な具体的事例である。

	L	F	T
ふりかえり	・全身を使うというのは、指先や表情までつけるということだとわかった。 (4年体育)	・〇〇さんのおかげで、できるようになったり、ともに努力してくれたりして、成果が現れた。 (6年音楽)	・次から、「やめて」って言われたら、すぐにやめる。いたずらは楽しいけれど、された人はいやな気持ちだから、やめたいな。(1年道徳)
	・条件制御をすることで、はっきりと調べたいことがわかった。 (5年理科)	・〇〇さんの考えで、違うところもあれば、同じところもあるという考えに変わりました。(3年理科)	・織田信長の生き様を学べたから、次は豊臣秀吉や徳川家康の生き様を調べて、まとめてみたい。 (6年社会)

	変容	展望	挑戦
省察	・色をぬるしかしてなかったけど、指でぐりぐりってぬったら、きれいだったし、のびしても、きらきらみたくて、パワーアップしました。 (2年図工)	・これからブラモデルをつくるときに、〇.〇倍のものがほしいというときに、正確に求められる。 図工の大きさを求めるときなどにも使いたい。 (5年算数)	・日常の中で、小数を見つけたい。偶数や奇数の関係、素数など、いろいろなものの体積などを学んで、 工作や図工に使っていきたい。 (5年算数)
	・友だちにアドバイスをもらって、理由の部分の書き方が良くなった。 (4年国語)	・(夢の時間割を考える学習で)自分の夢をかなえるために、必要なものがよくわかったから、これから何をしていくかわかるので、役立つ。 (5年英語)	・次はご飯とみそ汁の学習をするので、今回学んだガスコンロや包丁の使い方を生かして、ご飯とみそ汁が作れるようにしたい。 (5年家庭)

次項では、ふりかえり、省察それぞれの項目における考察を行う。

○ふりかえり

ふりかえりのLで記述されていたことは、本時の学習でのまとめ以外でわかるようになったこと、学習を通してできるようになったことなどであった。つまり、Lへの記述を通し、授業における自身の学びを再構成することにつながる事が考えられる。

ふりかえりのFで記述されていたことは、自己の考えとは異なる友達からの新たな気づき、友達の考えによる自己変容、自身と比較する中で見いだされた友達のよさに大別することができた。つまり、Fへの記述を通し、友達とのかかわりを再認識することにつながる事が考えられる。一方で、Lに記述した内容と重複が見られた事例があったため、この点については検討の余地が残る。

ふりかえりのTで記述されていたことは、学習を通して次時や先の単元、生活という様々な場でしてみたいこと、知りたいこと、生かしたいこと及び次時への改善点であった。つまり、Tへの記述を通し、自身の学びに関する課題の明確化につながる事が考えられる。

このように、ふりかえりを行うことで、自身の学びを再構成し、友達とのかかわりを再認識する中で、学びを次へとつなげることが可能となるであろう。

○省察

省察の1点目で記述されていたことは、単元の学習を通して新たにわかったことやできるようになったことである。単元の中で積み重ねてきた自身の学びを再構成し、自己の成長を確認することにつながる事が考えられる。

省察の2点目で記述されていたことは、単元の学習を通して得た知識及び技能や、別単元や他教科、実生活などでも用いることができる汎用的な力についてである。また、省察の3点目では、学習をもとにさらに挑戦したいことや発展させていきたいことなどが具体的な場面として記述されていた。これらは、自身の学びを転移可能なものにするためのきっかけとなり、さらに次への学習意欲を自ら喚起することにつながるであろう。一方で、省察の2点目と3点目の記述内容に重複が見られていることから、子どもにとってこの区別が難しいということが推察される。

このように省察を行うことで、単元での学びを再構成し、自己の成長を確認する中で、学びを転移可能なものにするためのきっかけを得て、学習意欲を喚起し、課題意識を明確にすることが可能となるであろう。

これまで述べてきたことから、ふりかえりの視点としてのL・F・T、そして省察の視点としての変容、展望、挑戦は、ふりかえり・省察を行う上で有用であることがわかる。文言については、教科の特性や発達段階をふまえ、さらなる検討が必要である。

ふりかえり・省察をする方法として、視点を明示するだけでなく、モデルを提示することや、ふりかえり・省察に記述させたい事象や場면을想起させるなどといった手だてがあることで、自己の成長を確認したり、次の課題を明確にしたりすることができた。また、発達段階に応じて図や絵、表などを作成し、簡易に学びの成果を自覚させるための工夫をすることの重要性が明らかになった。

ふりかえりの時期については、授業の終末時に行うことで本時の学習を再構成していることがわかった。また、その終末時のふりかえりを次時の導入時に紹介することで、思考のつながりのある学習をすることができた。学習のプロセスにおいてふりかえり・省察を行うことは、現時点までの自分の考えを再構成することができ、再構成したものをもとに、さらに考えを広げたり深めたりすることができることが明らかになった。上記、フェーズ1での知見を踏まえ、フェーズ2においても、本研究における重点をもとに、3年次における未来へ

生かす決めるを促す授業デザインを継続していく。

なお、以上を踏まえ、フェーズ1において収集されたふりかえり・省察をもとに、以下のようにふりかえり・省察を再定義した。第1に、本校の事例では、ふりかえりは一人で完結するものではなく、他者からの気づきに大きな影響を受けていたことが明らかになったため、ふりかえりに他者とのかかわりという要素を追記した。第2に、仮説に位置付けた用語を、本校における事例や考察で用いられた用語に置き換えた。具体的には、「再組織」を「再構成」に、「学ぶことの快感を感得する」を「学ぶことのよさを実感する」に置き換えている。

ふりかえり…授業により他者とのかかわりを通して、自己の考え方・感じ方を再構成し、自己の成長を確認する、学ぶことのよさを実感する、次の課題を明確にすること

省 察 …単元、題材を通して学んだことをもとに自己の考え方・感じ方を再構成し、自己の成長を確認する、学ぶことのよさを実感する、次の課題を明確にすること

子どものふりかえり・省察を見れば、教師自身の授業が教科の本質を踏まえた学びがどのくらい迫れたかを見取ることができる。教師は常に自分の授業の現実を子どものふりかえり・省察から可視化することで、知るという謙虚さの必要性が生まれることとなる。また、子どもにとっては、長い期間ふりかえり・省察を継続的に取り組むことで、学びのプロセスを意味付け、価値付け、関係付けることとなり、このことが「よりよい未来を志向する子」の育成につながるであろう。

そして、「よりよい未来を志向する子」の育成に向け、本研究における理論と実践の往還をくり返し、継続的に具体的な実践事例の蓄積と共有を図っていきたい。

<参考文献>

- ・小林和雄 (2019) 『真正の深い学びへの誘い』 晃洋書房
- ・田村学 (2018) 『深い学び』 東洋館出版社
- ・三宅ほなみ(2014) 『21世紀型スキル：学びと評価の新たなかたち』 北大路書房
- ・松尾豊 (2015) 『人工知能は人間を超えるか ディープラーニングの先にあるもの』 Kadokawa

<引用文献>

- ・多田孝志 (2018) 『対話型授業の理論と実践 深い思考を生起させる12の要件』 教育出版
- ・多田孝志 (2019) 『金沢大学附属小学校 第1回 校内資料：未来へ生かす決める授業』
『金沢大学附属小学校 第2回 校内資料：未来へ生かす決める授業』
『金沢大学附属小学校 第3回 校内資料：未来へ生かす決める授業』
- ・Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会：新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース(2018)『Society5.0に向けた人材育成～社会が変わる, 学びが変わる～』
- ・文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領』 東洋館出版社